

安藤徳彦（著）

リハビリテーション序説

大橋正洋（神奈川リハビリテーション病院・リハビリテーション医学）

知識や技術を身につける前に、理念を問う

現代は、過去の人類が経験したことのない、重度障害者や高齢障害者の増加に直面している。こうした未曾有の事態へ、われわれはどのように対処すべきなのであるか。

この問題には、地域の障害者福祉および行政、医療、教育、産業、政府および国際機関、そして先天性・後天性を問わず障害をもつ当事者と家族など多数の人々が、それぞれの役割と意思をもちながら取り組んでいる。

大きなテーマであるから類書も多いが、本書は「リハビリテーション医」の視点から、この問題に切り込んでいる。

内容に入る前に、安藤先生の立ち位置を紹介しておく。「誰が書いたかよりも、何が書いてあるかのほうが大事」との思いからだろう、中表紙に横浜市立大学リハビリテーション科・前教授とあるだけで、そのほかには一切、安藤先生ご自身の情報を示していない。

安藤先生は大学卒業後、早い時点でリハビリテーション医となった。1960年代は米国帰りの医師たちによる、リハビリテーション医学の啓発が開始されたばかりであったから、先生は「純日本製・リハビリテーション医」の第1号である。日本リハビリテーション医学会の理事や監事、横浜市立大学教授などの要職を歴任された後、最近では学識経験者として各種委員会に参加され、さらにPTやOT養成校の教壇にも立っておいでである。

先生がリハビリテーション医を志した当初に比較すると、この領域の知識や技術は格段に進歩し、そして関連職種の数も著しく増加した。まさに隔世の感がある。しかし、冒頭に記したようにわれわれを取り巻く環境は厳しさを増している。ノウハウの技術書が多く出版されるなかで、障害とは何か、

歴史的に障害者が社会のなかで体験してきたのはどのようなことであったか、わが国の社会保障はどうなっているのか、リハビリテーション医学の役割は何か、といった原点を確認して、考察結果を世に問いたいとお考えになったのであろう。理念を問うことや、歴史観を含む長期的視点に立って方向性を示唆する勇気は、疎まれがちな風潮がある。このなかで、安藤先生の提言は、実は求められていたものである。

以上から、多種の分野の人々が手にとってよい本である。しかし序文によると著者の本音は、リハビリテーション医学にかかわる初学者に、臨床の場で障害をもつ人を診る前に、本書を通じてリハビリテーションに関する理念を理解してほしい、そういう思いである。例えば医師が、良かれと思って作成する障害者診断書すら、考えてみれば障害者というラベルを貼る作業であり、それを不当と考える人々がいるということ、それを知ったうえで診断書作成を続けるべきである、と。

しかし初学者には、本書で理念に触れた後、ぜひ最新の知識・技術も身につけていただきたい。医療の現場では、冒頭に記したように先進的医療を受けた後、図らずも発生した障害に苦しむ人々は数多い。リハビリテーションの志を共有する多職種のスタッフと良いチームワークがあれば、障害をもって地域に戻ることへの不安が軽減され、障害を受け入れて環境に適應する力を取り戻す人々が確実に存在する。正しい理念に、知識と技術が伴えば、自分たちの支援が誰かの役に立つ、そう実感できる。そうした経験を励みとしてリハビリテーション支援を行えるチームを作り、維持すること。それが、今後ますます求められている。

（B5判 208頁 定価 3,400円＋税 2009 医学書院刊）